

幸田延のボストン留学

平高典子

要 約

幸田延(1870-1946)は音楽取調所(のちの東京音楽学校)を1885年に卒業後、母校に残り修学を続けた。学内の音楽会や鹿鳴館での演奏会などに登場し、ヴァイオリン演奏や合奏で活躍していた。当時日本は、コストのかかるお雇い外国人に替わる人物を養成するため、海外に留学生を派遣しており、音楽の分野では、延が文部省の第1回音楽留学生に選ばれた。彼女は1889年5月アメリカ・ボストンのニューイングランド音楽院に入学し、ピアノをフェルトン、ヴァイオリンをマールに習った。延は1890年7月ボストンを出発し、オーストリアのウィーンに向かった。

延のボストン留学は、東京音楽学校になって始まった本格的な西洋音楽導入のための留学生派遣の嚆矢であり、日本の西洋音楽黎明期のアメリカの恩人たちへのお礼と報告、そして次のヨーロッパ留学のための準備を目的としたものであったといえよう。

キーワード：幸田延、洋楽受容、ボストン

1. はじめに

幸田延(明治3(1870)年-昭和21(1946)年、以下、延と記す)は明治18(1885)年に音楽取調所を卒業した後、22年アメリカ・ボストンのニューイングランド音楽院the New England Conservatory of Music(以下NECと略す)に留学し、1年間ヴァイオリンとピアノを学んだのち、ウィーンに渡った¹⁾。これは文部省の派遣による女性の留学生としては第1号であり、また音楽の分野でも最初のケースであった。

本稿では、卒業からボストン留学終了までの時期を扱い、その間の史料を紹介して経緯を明らかにすると同時に、留学の目的と意義について考察したい。

すでに、延のボストン・ウィーン留学について言及した先行研究があり²⁾、本稿とは史料が重複する場合もあるが、本稿では、例えば先行研究で史料の内容が紹介されていたり、一部のみ紹介されていたりする場合、原文や全文を挙げる、などして、より詳しい提示を心がけた。

本稿の考察は、特に竹中亨の「明治期の洋楽留学生と外国人教師：ドイツとの関係を中心に」に多くを負っている。

本文中年号は、主に、留学前は明治、留学後は西暦で示した。

2. 卒業後の延と幸田家

明治12（1879）年設置された音楽取調掛は、18年2月音楽取調所と改称、同年12月再び音楽取調掛に戻り、20年10月東京音楽学校となる。

音楽取調掛に15年に入学した幸田延は、18年7月、第1回全科卒業生として音楽取調所を抜群の成績で卒業後、同期の遠山甲子（キネ）・市川ミチと共に取調所の助手となった³⁾。また11月から明治女学校の唱歌教育開始に伴い、取調所から派遣される形で週1回出向していた⁴⁾。19年には音楽取調掛に正式な勤務となり、20年には東京女子高等師範学校附属女学校にも出向⁵⁾、合わせて月俸14円を受けた。他にも東京音楽学校から唱歌譜取調や高等唱歌教授書及び楽譜の校正などを委嘱された。

これは当時の幸田家にとっては重要なことであった。父成延が18年12月内閣制度への移行に伴い非職になり、以後3年間収入の3分の1を受け取る移行期間を経て、その後は廃官になる、という深刻な事態に直面していたからである。一家は別に門を構えていた兄と共に神田区錦町に共同生活を余儀なくされた。もっとも、まもなく父母と延以下の兄弟は末広町に戻ったようである⁶⁾。

職を失った父はキリスト教へ傾斜する。旧幕臣にはキリスト教に精神の拠り所を見いだすものが多く、例えば、中村正直を始めとする「静岡バンド」などがある。父の正確な受洗についてはわからないが、20年には錦町講義所から下谷教会⁷⁾に転入したという記録がある⁸⁾から（〈執事〉という注記がある）、それ以前であったと考えてよい（施洗者はノックス）。露伴の評伝⁹⁾では、父が植村正久（1858-1925）の説教に感動して、家族一同を受洗させたが、露伴だけが最後まで受洗しなかったとされているが、下谷教会側の記録では、家族で父に続いたのは延一人で、21年9月両国教会¹⁰⁾から下谷教会に転入してきたことになっている（施洗者三浦徹¹¹⁾）。父は明治20年頃御成街道沿いに紙屋「愛々堂」を開く。免官になった露伴も店番をさせられた。父の影響で露伴も聖書に興味を持ち、教会や説教所に一応顔を出したことがあるという。

ただし父娘とも、事情はわからないが、30年10月に除名されている。明治20年代は、新神学の影響を受けて日本のキリスト教が一時期揺れ動き、脱会者も相次いだといわれるので、その流れを受けて離れたのかもしれないが、推測の域を出ない。露伴が後年再婚した相手は、キリスト教徒で、式は植村正久が執り行った¹²⁾ので、除名とはいえ、幸田家と植村との関係は何らかの形で続いていたと考えられる。

3. 留学までの教師たち

昭和6年の延の談話¹³⁾によると、卒業後は〈今で申す研究科〉で4年間ギョーム・ソーブレット（ギョーム・ソーヴレー）にピアノを、ティーチェ夫人に声楽を習った。

延は、この時期海軍軍楽隊のお雇い教師だったフランツ・エッケルト¹⁴⁾も教えに来ていた、と述べているが、後述するように卒業以前から彼からヴァイオリンの指導を受けていた¹⁵⁾。

ソーブレット¹⁶⁾は、ヴァイオリン・ピアノ・声楽、すべての演奏に秀で、また職業音楽家としての編曲やマネジメントにも長け、延らを連れて鹿鳴館をはじめ、様々な場所で演奏する機会を作り出した。延は彼から、ショパンの曲をたくさん教わり、またたくさん聞かせてもらったという。

ティーチェ夫人¹⁷⁾からは〈本当の声楽家で本当の歌ひ方を〉¹⁸⁾習ったと述べている。

音楽取調掛は20年には、「音楽のことを取調べ、学校用その他の唱歌や楽曲を選んだり、その教え方などを研究したりするところ」から、「音楽専門教育を施し音楽教員及び音楽家を養成する」東京音楽学校に昇格した¹⁹⁾。教授陣も、延のように一通り取調掛（所）の専門教育を修了した者が加わって徐々に充実してきていた。それに伴い18年頃から既に優秀なお雇い外国人教師を探し続けており²⁰⁾、ソーブレットらはいわばつなぎであったとされる。

明治21年11月ソーブレットの後任のお雇い外国人として弱冠28歳のルドルフ・ディットリヒ²¹⁾が着任した。ディットリヒの経歴と日本の近代西洋音楽に与えた影響については、詳しい研究がいくつかある²²⁾ので、ここでは割愛するが、ウィーン音楽院でヴァイオリンをヘルメスベルガー（ヨーゼフ・息子）²³⁾に、オルガン・対位法等をブルックナーに学んで、オルガン奏者として活躍する一方、ヘルメスベルガー四重奏団の奏者も務めるほどの、〈洋楽分野のお雇い外国人の中で〔中略〕最初の本格的な芸術音楽家〉²⁴⁾であった。延は、短い期間であったが、ディットリヒからクロイツァーの教則本を用いてヴァイオリンを習ったという²⁵⁾。

4. 留学決定のいきさつ

22年4月、延は音楽界からの文部省派遣留学生第1号に公式に命じられた。遠藤宏によれば、ディットリヒは〈外人教師の招聘も結構であるが、日本人教師を留学させてよき教師を早〔1字空白〕養成しなければならぬ〉²⁶⁾と主張、それが容れられての留学生の最初に、ディットリヒが来日以来その天才を認め推賞していた延が選ばれたという。このように、延の留学は、ディットリヒの推挙によって決定された、とされることが多い²⁷⁾。

ただ、ディットリヒの着任から延の5月の出発まで半年しかなく、ディットリヒの来日以前より留学の話があったと考えた方が自然ではないだろうか。22年4月の文部大臣榎本武揚の下命書には〈音楽修業として満三年米国及び独逸国留学を命す 但バイオリン科を専修すへし又初一ヶ年は米国ボストン府ニューイングランド、コンセルバトリーに於て後二ヶ年は独逸国

[下線引用者]に於て修業すへし²⁸⁾とあり、ディットリヒがこの留学に大きく関与していたなら、そもそもこの時点で既にボストンの後の行先はウィーンとなっていたはずだというのが、筆者の『明治音楽史考』の記述に対する疑念の一つの根拠となっている。

また延は留学準備のため8ヶ月間、後述するメリー（マリー）・プリンスの女子寄宿舎に入り英語を学んだというが²⁹⁾、この昭和6年の延の記憶を信じるならば、ディットリヒ着任以前に入舎していたことになる。延自身は〈研究科を四年やりました折、私の留学の話が出ました。行先きはアメリカです。ボストンにあるニュー・イングランド・コンサーバトリーの校長がメーソンさんとお友達と云ふので其処へ行くことになりました³⁰⁾と述べているだけで、誰かの推挙で留学が決まったとは言っていない。延が選ばれた理由や、行先がNECとドイツに決められた理由を明らかにする資料は、未見である。

18年文部省は「官費海外留学生規則」を改正し、明治15年以来東京大学関係者に限定されていた留学の対象が、文部省直轄学校の卒業生・教官にまで広がり、官費留学の目的も、より高度な専門分野の学術研究に力点がおかれるようになった。また、この頃、留学先はドイツが多くなった³¹⁾。延の留学も、このような文部省の方針と東京音楽学校内部の気運の高まりとが合致して行先が決定されたのではないかと考えられる。竹中は、明治20年〈東京音楽学校の設立とともに、西洋音楽の本格的導入のために留学生の派遣が決定された。行先としては、他にこれというツテもないなか、旧「お雇い外国人」のメーソンに打診した。メーソンは、ニューイングランド音楽院長のトゥルジェーと交友があり、その線でボストンに決まった。それと並行して留学生の選抜も進められ、その結果幸田が選ばれた³²⁾と推測している。

このように、幸田延を留学させようという意向が先行していた可能性は否定できない。しかし、いずれにせよ、留学生の当初の留学先は、東京音楽学校校長の伊澤修二と森有礼の意向で、まずは、伊澤もかつて留学し、メーソン³³⁾のいるボストンとなったのであろう。メーソンは、延に音楽取調掛に入学することを勧めて彼女を音楽の道へ導いた恩師である。また、ボストンのNECの院長トゥルジェー³⁴⁾は、日本側の要請を受けてメーソンを送った人であり³⁵⁾、この二人へのお礼と報告の意味でも、彼らの蒔いた種の最初の果実をまず彼らに見せるためボストンが行先として選ばれたとも考えられる。もちろんその後本格的な勉強は、音楽の本場と目されるドイツであることを前提とし、そのための準備を、気心の知れた人物の庇護で行うという意図も強くあったのではないか。

いずれにせよ出発は、前述の下命書の翌月5月であったので、それ以前に早くから内定は出ていたものと思われる。

5. プリンス嬢

延が〈ミス・プリンス〉と呼んでいる女性について詳細は不明であるが、いくつかの資料が残っているので、紹介したい。

【明治19年】『明治初期の在留外人人名録』所収の「The Tokyo and Yokohama Directory 1886」のPrince, Miss M. G. の項があり、「高等女学校雇（連絡先同構内）」とある³⁶⁾。

【明治19・20年】明治20年の文部省総務局「傭外国人表」東京高等女学校の項には、二人のプリンスが記録されている。両者共に、米国出身、居所は東京高等女学校構内となっている³⁷⁾。

〈メリー、グレー、プリンス女 Mary Gray Prince [受持学科] 英語学〉傭期限明治19年10月1日-21年9月30日

〈イサベラ、グラハム、プリンス女 Isabella Graham Prince [受持学科] 家事・英語学〉傭期限明治20年1月1日-21年12月31日³⁸⁾

【明治19-23年】延が出向していた東京高等師範学校附属高等女学校（この頃所属・名称がしばしば変更された）には、延とほとんど同時期同期間「メリー・プリンス」（明治19年後半-23年前半）と「イサベラ・プリンス」（20年初頭-23年前半）が勤務していた³⁹⁾。

【明治19-25年頃】

・明治19年〈高等女学校 東京師範学校附属高等女学校を独立せしめ上野なる音楽取調掛の場所へ近々移転せらるゝと聞く〉⁴⁰⁾。

・「文部省15年報（明治20年）」〈東京高等女学校 十月一日新ニ西洋家事教場ヲ設ケ本校生徒ヲシテ割烹、裁縫、家事取締、接客ノ方法其ノ他西洋ノ家事ニ関スル事柄ヲ練習セシム〉⁴¹⁾。東京高等女学校は明治19年、音楽取調掛構内から、旧体操伝習所跡に移転している。この時寄宿舎を新築した⁴²⁾。

【明治22年】東京盲啞慈善音楽会委員として「プリンス令嬢」の名前が挙がっている⁴³⁾。

【明治24年】「ミス・プリンス」は明治女学校の音楽会で歌を披露しており、また明治女学院の教員になった⁴⁴⁾。

【明治25年】露伴は延についての問い合わせに対する回答の中で、延が〈ミス、メリー、ミス、プリンス氏に英語を学〉⁴⁵⁾ んだと述べている。

【明治44年の回想】20年以上前プリンス老嬢が、記事が出た当時東京音楽学校神田分教場の場所にある校舎に住んで寄宿生を監督していた⁴⁶⁾。

【明治44年の回想】明治44年露伴の日記に、彼の知り合いがアメリカで「ミス・プリンス」の下男として働き、帰国後彼女の女子寄宿舎の家具大工をしたこともある、という記述がある⁴⁷⁾。

以上の史料から、延が回想で名前を挙げた「ミス・プリンス」は、英語教師である「メリー（マリー）・プリンス」である可能性が高い。

総合すると、メリー（マリー）・プリンスは、アメリカ出身のお雇い英語教師で、20-22年頃東京女子高等師範学校附属高等女学校、24年頃から明治女学院に勤務し、少なくとも21-22年頃には高等女学校の寄宿舎に関係していて、そこに延が入っていた、ということになる。

6. 留学までの演奏活動

留学前の延の演奏技術がどの程度であったかを、特定するのは難しいが、演奏例を挙げると、学内では、ピアノでは、18年の音楽取調所卒業演奏会でウェーバーの「舞踏への勧誘」を弾いている⁴⁸⁾。延が17歳の頃写譜したと記憶するショパンの「Grande Valse op. 42」も、この頃演奏されたと思われる⁴⁹⁾。

同じ卒業演奏会で、生徒ではただ一人ヴァイオリンで、「ラスト・ローズ・オブ・サマー」（フンテン氏作⁵⁰⁾）を弾いている。当日の伊澤のスピーチでは、ヴァイオリンは〈高等ナル専門欧州絃楽楽器⁵¹⁾〉とされていた。歌では20年7月カンパナ⁵²⁾の曲に邦語で歌詞をつけた二重唱でアルトを受け持っている（原曲名不明）。他にも合唱や合奏にも出演していたが、本稿では割愛する。

特筆すべきは学外での活動である。

19年11月に、築地の訓盲哑院での慈善音楽会で弦楽団の一員としてボルカとガボット（作曲者不明）を演奏、11月20日の*Japan Weekly Mail*（以下*JWM*と略す）に〈第1ヴァイオリンは、すぐれた音色とあざやかなボーイングの若い女性によって演じられた〉と賛辞が掲載された⁵³⁾。また20年3月には、鹿鳴館で開催された第1回日本音楽会演奏会で、ソープレーのピアノでノクターン（ショパン）をヴァイオリンで合奏したと推定される。これも*JWM*に賛辞が載った⁵⁴⁾。

日本音楽会は明治20年に発足した民間の西洋音楽推進団体で、華族などの貴顕や知識人、東京音楽学校・軍楽隊関係者、式部職伶人、外国人音楽教師などがメンバーとなって、鹿鳴館などで演奏会を開催した⁵⁵⁾。延は20年3月の第7回まで、すなわち、出発前に開催されたすべての演奏会に出演しており、独奏・合奏の両方で、ピアノ、ヴァイオリンを演奏し、歌も披露した。例えば、21年11月27日鹿鳴館で開催された第6回では、ヴァイオリンで、ピアノの遠山甲子と、ベートーベンの「アダジヲ」を合奏している⁵⁶⁾。この会では延は邦楽の合奏もよく行った。

この日本音楽会での活躍のためか、延といえば鹿鳴館のイメージが強かったようで、「欧州管弦楽合奏之図」（楊洲周延 明治22年作）のヴァイオリニストは、延がモデルと目されている⁵⁷⁾。延自身、それ以前瓜生繁に連れられて鹿鳴館の舞踏会に連れて行かれ、瓜生に代わって舞踏曲を弾かされたことがあると語っており⁵⁸⁾、鹿鳴館との関わりを認めている。このときはダンス練習会の伴奏を瓜生繁の代理で担当したと推測される⁵⁹⁾。

また明治20年、比留間賢八、山田源一郎、納所辨次郎と延で、日本最初の弦楽四重奏団を結成し演奏した、という記述、及び4人の正装写真が、比留間賢八の研究書に掲載されている⁶⁰⁾が、詳細は不明である。

このように、演奏面で延は、既に東京音楽学校を代表する人材として、内外で活躍していたといえよう。

理論面のレベルの特定はなお難しいが、音楽取調掛時代の試験の答案や教科細目⁶¹⁾から判断すると、卒業時には和声学は転調を含みバス課題を一通りは学んで簡単な唱歌は作曲できる程度、楽典・音楽史共にやはり一通りの初歩をマスターした、といったところであろう。

延は後に、ウィーンに留学するまで、ベートーベンやモーツァルトくらいは知っていたが、ブラームスは名前さえ知らなかったと、自分の無邪気を笑っている⁶²⁾が、さらにそれ以前の日本出発時となると、確かに世界レベルから見たら、実技・理論ともかなり無邪気な段階であったであろう。

7. ボストンへ

以後、年号は西暦とする。

おそらく1888(明治21)年後半に留学の話が決まると、前述したように、延はプリンス嬢の寄宿舎で英語を学び、〈グッドモーニング〉くらいは言えるようになったというが、これは明らかに謙遜であろう。プリンス嬢は、洋行のための洋服も作ってくれたという。またこの話が出てから、当時の文部大臣森有礼によく招待され、後妻の寛子にピアノを教え、食事をごちそうになった⁶³⁾。森は翌1889年2月に暗殺された。

1889年4月23日には讀賣新聞に、4月28日には東京日日新聞に、延の留学を報じる記事が掲載された。

延は5月3日、イギリスの船Belgic号に乗り横浜港を出帆した⁶⁴⁾。伊澤修二他多数の東京音楽学校関係者や家族が見送った⁶⁵⁾。ユニテリアン派の牧師ナップKnapp夫妻⁶⁶⁾とその息子が同行した。日本人はあと一人のみ(JWMによれば名はOzuka)だったという。

11日ハワイ着、日中市中を見物して夜出港した。航海中には演奏会などの催しもあり、延も旅のつれづれに、「ひとつとや」⁶⁷⁾を披露したりしつつ、19日にはサンフランシスコに到着した。偶然税関で「深澤」氏に遭遇したのち、パレスホテルに投宿した。ここで『ベニスの商人』を観劇し、劇中に挿入された男声四部合唱に、サンフランシスコの、しかも音楽が専門でない演劇の中で歌われてもこれだけのレベルならば、ボストンやヨーロッパではどれほどであろうか、と期待に胸をふくらませた。

21日サンフランシスコを出発し、その後は列車で27日ボストンに到着。ホテルからナップ氏がNECの院長トゥルジェーに電話した。

翌日28日院長トゥルジェー自らホテルに迎えに現れたので、延は驚愕する。ナップ夫妻とはここで別れ、トゥルジェーと鉄道馬車でNECに向かった。延が固辞してもトゥルジェーは延の荷物を終始持ってくれるので、延はここでも驚く⁶⁸⁾。

延はトゥルジェーに付き添われて学校へ到着するなり、入学と、寄宿舎の入舎の手続きをとった。1889-1890年年報に在籍中の学生の出身地リストがあるが、日本が1名となっている⁶⁹⁾ため、延の入学は正式であって、聴講生のような形ではなかったことがわかる。

延はその翌日、旅の疲れからか、食堂の鐘が鳴るのも気づかず寝続け、病気になったのかと心配するまわりの人にしばしば見舞いに来られ、閉口したという。人々は非常に親切だったが、当初は英語もまだよくわからず、まわりは外国人だけなので、寂しく感じたという⁷⁰⁾。

数日後もう一人の恩人メーソンにも会った。帰国後のメーソンは、新しい教科書作成、アメリカ各地での講習会講師、各地の学校での臨時授業など、精力的に活動していた⁷¹⁾。〈数日の後兼て日本にて師と仰ぎしメーソン氏に面会しぬ、氏が傍の人に日本にてテフテフへ [1881年発行音楽取調掛編『小学唱歌集』初編に収録された「蝶々」⁷²⁾を教へたりし頃は小さかりしと語られしかば、今もご覧の通り左迄大きくは御座りませぬと嘴を入れて、皆々に笑はれぬ⁷³⁾。

メーソンの9月15日付伊澤宛ての書簡によると、延は、夏休みをメーソンの故郷メイン州で過ごし、ヴァイオリンやピアノの練習をしたり、メーソンの孫たちにヴァイオリンを教えたりしてすごした⁷⁴⁾。原文を挙げる。大文字小文字の使いわけは原文のままである。

Boston, Sept. 15. 1889.

Dear Mr. Isawa.

We have all returned from Maine, including Miss Koda.

Miss Koda has had very good health, since she had been in America. She got a good start before the vacation and since she has been in Maine, has been very diligent in her practice of music.

She has practiced the Violin three hours a day and the Piano two.

Besides that, she has given the twin boys lessons on the violin and has paid - by that - for a very nice gold watch. A ladies wath [*sic*] the same style as the one I carried in Japan.

She had commenced her lessons in the Conservatory from the 12th last. Besides the Violin & Piano, she thakes [*sic*] lessons in Harmony with Mr. Emery. So she now has Mr. Fealton [*sic*] as her teacher of the Piano, the King of Pianists, Prof. Mahr on the Violin, one of the best in the world, and Mr. Emery is one of our very best Harmony teachers.

I do not know whether you have my Revised "National Music Course", Books & Charts. If not, I should be pleased to send them to you.

Would you like to have me send you the Music which she is studying? If so I will send it to you. I suppose you understand that Dr. Tourjee and his family reside in the Conservatory, so that they look after Miss Koda as though she were a Member of their family.

I understand Miss Koda that some of the Japanese musical "Instrument Makers" are manufacturing Organs. I am glad to learn that. Although you have made reeds for shos [笙：引用者注] long before we did in this country or in Europe, I suppose they may find some difficulty

in making [*sic*] those for the Bass notes, or in obtaining an evenness in the power of the tones between the Bass & the Treble.

These are factories in this country where they make Reeds for Organs. Only - by machinery.

If I can be of any service to you in any way, I will do anything for you with pleasure. My family are all in good health. My own health is good.

With my best regards to Mr. Isawa, and all who may remember me.

I remain,

yours truly,

L. W. Mason

この手紙にあるように、NEC敷地内に居住するトゥルジェーとその家族は、延を自分の家族の一員のように面倒をみているという。

また毎日ヴァイオリンを3時間、ピアノを2時間、練習しているとあることから、延はヴァイオリンにより比重はあるものの、両方の楽器を並行して練習していたことがわかる。

8. 延を歓迎する NEC

NECは1867年トゥルジェーによってボストンで創立された、アメリカで最初の私立の音楽学校で、延が入学した当時2000名余の学生が在籍していた。学生は4分の3が学院のあるマサチューセッツ州出身だが、それ以外にもアメリカ各地から集まっており、英語圏出身者を中心に、海外からも数十人の留学生がいた⁷⁵⁾。ピアノ、ヴァイオリン、オルガン、声楽、理論（和声や作曲）など11のコースとCollege of Musicがあり、コースは3年間6学期で終了する。例えば、ヴァイオリンでは室内楽も学べるようになっている。延がどのコースのどの学期に登録したかは不明である。

延の到着後、雑誌*Cosmopolitan*にThe New England Conservatory of Musicというタイトルで次の内容の記事が載った。

20年前トゥルジェー氏は目賀田氏と次のような会話をかわした。「我々の音楽を受け入れることなしに我々の教育の利益を完全に享受することはできない。そして、我々の音符システムを受け入れなければ、キリスト教国の水準による文明化はできない。」「しかしわが国の楽器はどうしたらいいのか」「真の音階に合わせ直しなさい。」今や日本では三万の学校や大学で改心させられた音楽が教えられ、日本のキリスト教化はキリスト教音楽によって著しく助けられた。昨年〔度〕この改革の結果がNECに到着した、日本から最初の生徒が到着したのだ。素晴らしい若い娘で、西側の音楽を徹底的にマスターして母国での音楽の勉強を完成するために、女王〔=皇后〕から送られて来たのである。音楽による宣教

に役に立つことが、NECの当初からの理念の一つである⁷⁶⁾。

トゥルジェーが作ったNECはミッシヨナリースクールの性格が強く、例えば卒業生には、延の渡米と同時期に宣教師として長崎のミッション・スクールである活水女学院へ渡り、音楽を教えたビング⁷⁷⁾のような女性もいる。トゥルジェーは、メーソンの日本での業績を高く評価したが、それは〈音楽による宣教〉に成功したからであった⁷⁸⁾。

後述のように、延の渡米当時トゥルジェーの健康状態はよくなかったはずだが、それにもかかわらず、前述したように遠路迎えに行き、自ら彼女の手荷物も運んだという。また、入学してからは家族のように彼女の面倒をみた。彼のきわめて懇切な態度からは、自分が日本に蒔いた〈音楽による宣教〉の〈改革の結果〉である延を迎えて、どれほど嬉しかったかがえる。

トゥルジェーにこの喜びを与えた延のボストン留学は、恩返しのごりごりのチャンスであった。トゥルジェーは延の在学中から病がちで90年には院長の仕事も辞したほどであった。そして、延がウィーンへ旅立った翌年の1891年4月に57歳で亡くなっている⁷⁹⁾。彼の追悼記事の中には、彼の功績によって日本の音楽のシステムが全く変わり、30000の学校がNECの方法に改良されたと評価しているものもある⁸⁰⁾。

延の入学を、7月の*Boston Musical Herald* (NEC関係の記事中心の月刊誌)は次のように報じている。〈Our pupils hailed with curiosity and cordial welcome, a month ago, the advent of the daughter of a Japanese General. She comes at government expense to study the violin and piano and all wealth of our music, to become by and by a teacher at home of the great Western art.〉⁸¹⁾

NECの関係者や生徒にとっては、延が自分たちの音楽によって日本がキリスト教化し未開から脱していく、という最初の成功モデルであり、それゆえ、きわめて好意的に受け入れられたようすが見てとれよう。

9. 音楽関係者たち

延は主専攻のヴァイオリンをエミール・マール⁸²⁾、ピアノをカール・フェルトン⁸³⁾に習った。両者共にドイツ系で、すぐれた演奏家であった。

フェルトンは1889年の冬ボストン交響楽団(以下BSO)のソリストとして、ボルチモアやデトモルトなどヘツアーに出かけ⁸⁴⁾、1890年3月には定期演奏会のソリストを務めた⁸⁵⁾。同年、病気のトゥルジェーに代わって、院長の座に着くなど、まさに油ののりきった時期を迎えていた。マールは彼に比べると知名度が低いだが、NEC所蔵の学内演奏会プログラムにはしばしば名前が登場している。

メーソンは日本で自分の専門でない和声学も教えなくてはならなかったため、生徒の答案をアメリカに送りNECのエメリーに添削して返送してもらっていた経緯がある⁸⁶⁾。延の和声学の先生はそのエメリー⁸⁷⁾であった。旧知の延に特別な思い入れがあったであろうが、延の在

学中病気になり、実質あまり授業にならなかったのではないかと考えられる。エメリーもトゥルジェーの死去数日後没している⁸⁸⁾。

ボストン時代、延は寄宿舎だったので、あまり外出しなかったが、それでも、BSO（1881年創設）常任指揮者のニキシユ⁸⁹⁾ やダルベール⁹⁰⁾、ヘッキング⁹¹⁾、サラサーテ⁹²⁾ を聞いたという。

10. 出演した演奏会

NECには、学籍簿など在学中の延の記録は残っていない。ただ、延の演奏会出演の記録が数件確認できる。

まず1890年3月エミール・マールのクラスの発表会でViuxtempsの「Romance」Op. 40を演奏した⁹³⁾。また4月にNECのthe Beneficent Societyの月例会で、曲名は不明だが2曲小曲を演奏している⁹⁴⁾。

1890年4月に美山豊という女性がソロで歌う「The Gate of Heaven」(Tours)という歌にヴァイオリンでオブリガートをつけている⁹⁵⁾。牧師美山貫一の妻である豊⁹⁶⁾は、夫と共に1885（明治18）年に渡米し、1889年9月、延よりわずかに遅れてNECに入学した。もともと歌が下手だったが、夫が、信仰を鼓吹するためには歌の力が有効という信念の持ち主で、彼の伝道の助けとしたいがために、声楽を学んだという。同じ演奏会で、聖歌隊の一員として「The Smiling Dawn」(Handel), 「Puer Natus in Bethlehem」(Rheinberger), 「Cradle Song」(Gottschalk), 「Estudiantina」(Lacome)を歌っている⁹⁷⁾。没後豊の娘が〈幸田延子さんとボストンで一緒であつたので上野の音楽学校に出たらと勧められましたが、私達三人のことを考えて御断りしました〉と語っている⁹⁸⁾。

11. ウィーンへ

〈一日一と寄宿生とも親しくなり、朋友も出来、言葉も少しづつは解るようになり、おもしろく翌年7月まで在学⁹⁹⁾したが、予定の1年は過ぎた。既に述べたように、文部省の命では、延はヴァイオリンを専攻し、初め1年をボストンのNECで、後の2年をドイツで学ぶことになっていたが、〈種類の事情の為め¹⁰⁰⁾ オーストリアへ向かうことになる。具体的な理由を明らかにした資料は未見だが、1890（明治23）年頃には東京音楽学校の中心となっていたディトリヒの提案で、彼の母校を目指すことになったと推測する。この転学の命は公的には7月に下されている¹⁰¹⁾。

4月に、延の教師であったフェルトンとマールが、伊澤に書簡を送った。長文だが重要な史料なので、全文紹介する¹⁰²⁾。

Boston U. S. A. April 18. 1890
N. E. Conservatory of Music

Mr. S. Isawa,
Tokyo Academy of Music

Dear Sir,

I take the liberty to write to you in the interest of my pupil Miss Nobu Koda, who feels exceedingly sorry, that she is ordered to break up her musical studies here and to resume them in Germany and I cannot help to consider this a rather unfortunate and experimental arrangement for her.

All music teachers of higher standard have of course the same end in view, namely: to make their pupils artistic performers and thorough musicians, however the methods, by which this end is reached, are manifold and ever changing according to the individuality of the teacher and the pupil. Miss Koda now has at present fully entered in the spirit of my method, enjoys her work and is advancing at a rate, that she could leave here as a very creditable performer and accomplished musician in about two more years. After she has completed her course here, a year's travel and stay in Europe would of course be beneficial to her taste, widen her horizon[*sic*] in musical and general matters, but even this would be more of a luxury, than of a necessity, as we have as good instructors here as they have there and the musical life of Boston can compete with the life of musical centres in Germany.

I could understand, if you had sent her from Japan directly to Germany, but it seems almost cruel, to have her taken away in the midst of a course, at a point, at which she is just commencing to ripen the results of her first year studying here.

I hope, you will reconsider the matter once more and change your decision in her favor. I am very much satisfied with the talent and progress of Miss Koda and shall be glad to have her continue with me.

Very respectfully

Carl Faelten

Professor of Pianoforte at the New England Conservatory Boston.

I fully endorse the views of Mr. C. Faelten & would be glad if Miss Nobu Koda would continue her studies under my tuition.

Very respectfully

Emil Mahr

Prof. of Violin at the New Engl. Conservatory Boston

この手紙で、特にピアノ教師であるフェルトンは、延がNECでの修学をちょうど波に乗ってきた1年で終了することは教育的に好ましくなく、あと2年は自分のもとで学ぶべきであるとしている。また、ボストンの音楽環境がドイツと遜色ないと誇っている。この4月の時点では、延の行先がまだドイツであったことがわかる。

延がメーソンの娘、アイリッシュ夫人へ宛てた6月末の手紙が残っている¹⁰³⁾ (間違いが多いが、すべて原文のままである)。

#52. Austin St.
Cambridge Mass.
June 30th 1890

My dear Mrs. Irish

It was very kind of you to gave me your picture, I thank you for it. Perhaps you know already that Mr. Isawa has decided to have me to go to Vienna this summer. & I must start befor long. I am sorry for I can not see you any more and all friends of Buckfield and more over I must leave my teachers of the N. E. C. But I can not help, so I only hope that I will find some good friends and have a good opportunity for my musical education.

Katie and Mrs. Mason gave me a nice preasent for farewell. Mr. Mason gave me the beautiful violin. I do not know how I will explain my gratitude. I shall never forget them. I shall be very happy to hear from you on a while, also I will try to write you. I think I will remain here in Cambridge a week or two. Give my love to Mr Irish & all boys and Lucy. Hoping your pleasant summer & happy life. I will close with much love.

Your loving friend
Nobu Koda

I will send you one of my picture.

この時点では、転学先はウィーンとなっている。この文面からは、伊澤修二が単独で延の行先をウィーンに決定したように読めるが、NEC側に説明しやすいようにそうしたのであろう。

この2つの書簡から、延のボストン滞在が最初から1年であることは、当初NECには知らせておらず、4月頃突然日本から転学命令が出たという話にしたのではないかと、という推測も可能であるが、断言はできない。もしそうだとしたら、最初から1年しかいないとなれば扱いが粗略になることを恐れたのかもしれないし、あるいは単に礼儀上の方便であったのかもしれない。

両方の書簡から、延がNECの生活になじみ、またその高いレベルの指導にもよく応えていたことがわかる。メーソンは延にヴァイオリンを贈って、別れを惜しんだ。延もボストンを離れることは非常に悲しかったようである。

この手紙のとおり、まもなく7月中旬に延は単身ポストンを発ち、ウィーンへと向かった¹⁰⁴⁾。もはや英語にさほど不自由はしなかったため、付き添いは不要であったものと思われる。

NECでの1年間で、おそらく延の実技と理論の能力はめざましく向上したと思われるが、それでもウィーンに渡ってからは、ヴァイオリン専攻でウィーン音楽院に入学するまで、学外で1年間準備をしなくてはならなかった¹⁰⁵⁾。ここに、当時のウィーンとボストンの音楽的レベルの差が現れているといえよう。延が直接日本からウィーン音楽院を受験して入学することはおそらく不可能であったであろうと考えると、ボストンで準備してからウィーンに挑戦したことは、望ましい決定であった。

12. おわりに

延のボストン留学の経緯と目的については、明確な史料がない。

竹中によれば、明治20年の東京音楽学校設立は、そもそもそれ自体欧化主義の賜物であり、それとともに音楽の位置づけが、音楽取調掛時代の初等教育に奉仕する手段から、高尚な、審美的観賞の対象になった。同時に、それまでが和洋融合の上に「国楽」を作ることが目的であったのに対して、西洋からの音楽の本格的摂取が目指されるようになった。そのために、音楽学校設立後の早い段階から、必然的に留学生の海外派遣が検討されていた¹⁰⁶⁾。

その留学生としてなぜ延が選ばれたかを推測すると、やはり、彼女が当時国内では並ぶ者がいない実力を持っていたから、という以外にはなからう。

その延でさえ、音楽の本場と目されていたドイツへ直接派遣するには実力が欠如していて、準備が必要であった。そこで、ステップボードとなる場所と期間を設けることにし、おそらく相談を受けたメーソンの勧めもあって、最初の行先は、初等音楽教育導入の当初から日本に深く関わっている機関であるNECとなった。加えて、それまでの協力への報告とお礼の意味もあったと考えられる。しかし、ドイツに移ってからの本格的な西洋音楽摂取が最終目的であったので、ボストン滞在は当初から1年と決められていたのであろう。

結果的には、延の登場は、日本への〈音楽による宣教〉の成功の証しとして、NECの関係者を喜ばせ、また、NECの教育の成果があって、延は当時の世界の音楽教育の最高峰であるウィーン音楽院に入学することができた。延のボストン留学は、立派に当初の目的を果たし、成功裡に終わったと結論づけてよいであろう。

(本稿を執筆するにあたって、手代木俊一氏、安田寛氏、故中村理平氏の多大な協力を受けた。記して感謝する。)

注

- 1) 延の略歴及びウィーン留学については平高典子「幸田延のウィーン留学」(『論叢』玉川大学文学部紀要 第53号 2012年, 101-121頁)を参照されたい。
- 2) 主な論文, 書籍を挙げる。
 瀧井敬子「幸田露伴と音楽, そして妹の延」東京藝術大学音楽学部紀要26号 2000年, 87-107頁
 瀧井敬子『漱石が聴いたベートーヴェン—音楽に魅せられた文豪たち』中公新書 2004年
 竹中亨「明治期の洋楽留学生と外国人教師—ドイツとの関係を中心に—」大阪大学大学院文学研究科紀要, 47号 2007年, 1-25頁
- 3) 「東京藝術大学音楽学部旧職員履歴書」によると, 給金8円(のちに金額は変動する)。ただし在掛中の明治16年から既に見習生として月々3円(のちに4円)受給していた。
- 4) 明治女学校校長木村熊二が取調所に派遣を依頼し, 延が選出された。「諸向往復書類 明治18年96丁 明治女学校唱歌教育のため幸田延派出に関する往復書簡(別紙:唱歌洋琴伝習派出依頼者心得)全8通」東京藝術大学附属図書館貴重資料DataBase, 及び, 青山なを『明治女学校の研究』(『青山なを著作集』第2巻)慶應通信1982年, 492頁。
- 5) 明治22年まで。那須良利『創立五十年』東京女子高等師範学校附属高等女学校 1932年, 129頁。
- 6) 幸田成友「凡人の半生」『幸田成友著作集』第7巻 中央公論社 1972年, 46-51頁。塩谷賛『幸田露伴』上 中公文庫 1977年, 56頁。
- 7) 現在の下谷教会とは関係がない。
- 8) 〈下谷教会の執事であり, また長老であった宮部文臣の覚書の会員簿〉による。青山 前掲書, 530頁。
- 9) 塩谷 前掲書, 41及び59頁。
- 10) 現永福町教会。長老派。日本基督両国教会編『五十年の略史』日本基督両国教会, 1929年。
- 11) 植村自身は明治20年には番町教会を建立している。
- 12) 塩谷 前掲書, 59頁。
- 13) 幸田延「私の半生」『音楽世界』第3巻第6号, 1931年(以下「私の半生」), 38頁。
- 14) Franz Eckert (1852-1916) ドイツの音楽家。明治12年から海軍省雇教師(海軍軍楽隊教師), 16年から19年音楽取調掛を兼務し, 管弦楽, 和声, 楽典を担当した。エッケルトについては以下を参考にした。
 中村理平『洋楽導入者の軌跡—日本近代洋楽史序説』刀水書房 1993年, 第7章「フランツ・エッケルト」
 東京芸術大学百年史編集委員会編『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇』第1巻(以下『百年史』第1巻)音楽之友社 1987年, 245-247頁
- 15) 延は明治18年2月に4年生後期見習生として期末試験を受験しているが, ヴァイオリンは4年生ではただ一人受験している。中村理平は, おそらく助教・4等伶人多久随を介してエッケルトの指導を受けていたと推測している(中村 前掲書, 279頁)。
- 16) Guillaume Sauvlet (1843-?) オランダ人の音楽家。エッケルトの後任として明治19年から21年まで勤務し, ピアノ・風琴, 絃楽, 管楽, 唱歌, 和声, 楽曲制作の理論及び実施など, 幅広く担当した。ソープレットについては以下を参考にした。
 中村理平 前掲書, 第11章「ギヨーム・ソーヴレー」『百年史』第1巻, 247-249頁
 芸術研究振興財団東京芸術大学百年史編集委員会編『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇』第2巻(以下『百年史』第2巻)音楽之友社 2003年, 1562頁
- 17) Johanna Bertha Maria Tietzé (生没年不詳) ドイツ人の音楽家。明治20年から22年講師としてピアノを(『百年史』第1巻, 3頁), 22年から24年唱歌を(『百年史』第2巻, 1565頁)を担当した。
- 18) 「私の半生」, 38頁。

- 19) 『百年史』第1巻, 第2章参照。
- 20) 例えば明治18年文部省経由で、イタリアに(管)弦楽器の専門家を探そう、在イタリア特命全権公使・田中不二麿に依頼している(『百年史』第1巻, 248-249頁)。
- 21) Rudolf Dittrich (1861-1919) オーストリア・ハンガリー帝国出身の音楽家。明治21年から27年まで在職, ヴァイオリン, 和声学, 作曲法, 唱歌を担当した。『百年史』第1巻, 511-522頁。
- 22) 主なものを挙げる。
Hirasawa, Hiroko (1996): „*Rudolf Dittrich - Leben und Werk*“, Dissertation, Universität Wien
平沢博子「西洋音楽の神髄を伝えたお雇い外国人の生涯 ルドルフ・ディットリヒ物語」『おんかん: 音楽鑑賞教育振興会会報』(1998年10月から2003年3月53回連載) 音楽鑑賞教育振興会, 1998-2003年
竹中 前掲論文
- 23) Joseph Hellmesberger (d. J.) (1955-1907) オーストリアのヴァイオリニスト, 作曲家, 指揮者。彼については, 平高 前掲論文, 第5章及び注38を参照されたい。なお, ディットリヒ自身が東京音楽学校に提出した英語の履歴書では, ヴァイオリンの師は, 彼の在学中ウィーン音楽院院長であったJoseph Hellmesberger (d. Ä., d. J. の父) (1828-1893) となっているが, Hirasawaは, 当時父の方はヴァイオリンのレッスンはしていないので, 習ったとしたら個人的にはないか, と推測している (Hirasawa, *ibid.*, p. 20)。
- 24) 竹中 前掲論文, 13頁。
- 25) 「私の半生」, 38頁。ただし, 延は明治44年には〈ヂットリツヒさんが, 音楽学校へ見えられるやうになりましたのは, 私の卒業する少し以前のことで御座いました。ですから, 私はヂットリツヒさんに就いて学んだのでは御座いませんのです〉と述べている(「音楽界の婦人— 音楽に乏しい家庭の空気 幸田延子」『婦人画報』臨時増刊号 明治44年1月 1911年, 24頁)。もっとも, この談話は間違いが多いので, 注意が必要である。
- 26) 遠藤宏『明治音楽史考』有朋堂 1948年, 292頁。
- 27) 例えば, Hirasawa, *ibid.*, p. 46 (Im Jahre 1889 ging sie ins Ausland um Musik zu studieren und zwar auf Empfehlung Dittrichs (1889年に彼女はディットリヒの推挙により, 海外へ音楽留学した))。
- 28) 幸田成貴氏所蔵資料。
- 29) 「私の半生」, 39頁。
- 30) 「私の半生」, 38頁。
- 31) 石附実『近代日本の海外留学史』中公文庫 1992年, 及び, 辻直人『近代日本海外留学の目的変容—文部省留学生の派遣実態について』東信堂 2010年, 参照。
- 32) 竹中 前掲論文, 4頁。
- 33) Luther Whiting Mason (1818-1896) アメリカの初等音楽教育家。1880-1882年音楽取調掛のお雇い外国人として勤務した。彼の生涯は, 中村の前掲書第9章に詳述されている。
- 34) Eben Tourjée (1834-1891) アメリカの教育家, 合唱指揮者, オルガニスト。1853年以来いくつかの音楽教育施設を経営したのち, 1867年R. GoldbeckとNECを創立。1890年まで院長。アメリカ音楽教師協会の会長も務めた。(『ニューグローヴ世界音楽大辞典』講談社 1993年)
- 35) 中村 前掲書, 483頁。安田寛は, メーソンの来日を要請した人物を, 森有礼と推理している(安田寛『唱歌と十字架 明治音楽事始め』音楽之友社, 1993年)。
- 36) 『明治初期の在留外人人名録』(明治初期歴史文獻資料集/寺岡寿一編, 第3集 別冊) 寺岡書洞 1978年。
- 37) 「明治二十年十二月末調 傭外国人表」文部省総務局(国立公文書館所蔵内閣文庫『傭外国教師録』(二) 明治14-20年)。この資料のコピーは中村理平氏よりいただいた。
- 38) なお明治19年の同リストには, 「マリー・プリンス」のみ〈英語学教授〉として出てくるという(中村 前掲書, 705頁)。
- 39) 那須 前掲書, 128頁。

- 40) 明治19年2月20日『東京日日新聞』。
- 41) 「日本帝国文部省年報第15」(明治20年), 11頁, 国立国会図書館近代デジタルライブラリー。
- 42) 東京女子高等師範学校編『東京女子高等師範学校六十年史』日本教育史文献集成 1981年復刻第一書房, 236頁。
- 43) 「東京日日新聞」5月2日。日本近代洋楽史研究会編著『明治期 日本人と音楽』国立音楽大学・大空社 1995年, 147頁。
- 44) 青山 前掲書, 151及び654頁。
- 45) 鈴木光次郎『明治閨秀美譚』東京堂書房 1892年, 105頁。
- 46) 橘糸重のインタビュー記事の中に挿入された, 記者の思い出話(「音楽界の婦人 三 橘糸重女史にお目にかかる記」『家庭画報』臨時増刊号 明治44年1月 1911年, 29頁)。分教場がおかれたのが31年なので, 分教場ができる以前の話か。ただし, 前述したようにこの記事は不確かな記述が多い。
- 47) 幸田露伴「露伴日記」『露伴全集』38巻 岩波書店 1979年, 61頁。
- 48) 『百年史』第1巻, 219-220頁。
- 49) 後年の談話に写譜楽譜が挿入されている(「私の半生」, 36-37頁)。譜面から, この曲は確かにop. 42であることが特定できる。ただ, 瓜生繁が書いたとされる標題は〈Grand Valse Brilliante〉となっているが, op. 42のワルツは一般的にbrillianteはつかない。
- 50) ヴュータン(Henri Vieuxtemps)のヴァイオリン曲《Bouquet Américain》, op. 33第5曲「Dernière rose de l'été」(フロトーのオペラ『マルタ』で歌われる「庭の千草」のメロディをテーマにしたパラフレーズもの)か。
- 51) 『百年史』第1巻, 221頁。
- 52)カンパーナFabio Campana (1819-1882)。イタリアの作曲家, 指揮者, 声楽教師。歌曲やオペラなどを数多く作曲した。
- 53) 中村 前掲書, 710頁。
- 54) 中村 前掲書, 712頁。
- 55) 日本音楽会については, 以下を参考にした。
中村 前掲書, 587-591頁
藤本寛子「明治20年代の東京音楽学校と日本音楽会」『お茶の水音楽論集』第8号 2006年, 11-23頁
- 56) 「日本音楽会」東京日日新聞1888年11月29日
- 57) 野村光一『お雇い外国人 10 音楽』鹿島出版会 1921年, 175頁。
- 58) 弟子の都留正子の回想。日本洋楽資料収集連絡協議会編『紀尾井町時代の幸田延』私家本 1977年, 47頁。
- 59) 生田澄江『瓜生繁子—もう一人の女子留学生』文藝春秋企画出版部 2009年, 158頁。
- 60) 飯島国男『比留間賢八の生涯—明治西洋音楽揺籃時代の隠れたる先駆者』全音楽譜出版社, 1989年, 口絵写真及び48頁。
- 61) 東京藝術大学附属図書館貴重資料DataBase参照。
- 62) 幸田延, 安藤幸他『「ワルツ合戦」をめぐり, ウィーンとシュトラウスに就ての座談会』『音楽世界』7巻10号 1935年, 162頁。
- 63) 「半生」, 38-39頁。
- 64) JWM 1889年5月11日。この資料のコピーは中村理平氏よりいただいた。
- 65) 幸田延「外行記要」『同声会雑誌』第1号 1896年, 23頁(以下「外行記要」)。以下のボストン時代の記述は, 特に断らない限りこの回顧談と「私の半生」にもとづいている。
- 66) 夫はArthur May Knapp (1841-1921)。1887年ユニテリアン協会から日本に派遣されていた。赤司道雄編『同仁キリスト教伝道百年史』キリスト教同仁社 1990年。
- 67) 「外行記要」, 24頁。延は, 曲名しか書いていないが, 明治9年にアメリカ留学中の伊澤修二がメー

ソンの協力を得て編曲し、アメリカ独立100年記念博覧会に出品したとされる「ひとつとや」変奏曲のことか。ただし、この曲は、ピアノ曲である。伊沢修二特別展プログラム 昭和62年 長野県伊那郡高遠町/伊沢修二先生記念祭実行委員会。なお、この楽譜は、東京藝術大学が所蔵する。
68) 延は以下のように述べている。

全氏 [トゥルジェー] へは伊澤氏より既に紹介状の達し居りしと見え、翌朝態々旅館まで迎えに來られたり、此処にて日本を出立の時より何くれとなく注意を蒙りし、ナツプ夫妻に別れを告げ、トルジエー氏と共に鉄道馬車に乗りて音楽学校へ到る、道すがら氏は如何に我が辞するも許し球はで、わがカバンを始終携へられしには驚嘆せり、
学校へ着するや否や即日入学の手續を終り、且つ入舎することとはなれり (『外行記要』24頁)

ボストンのホテルでナツプさんが学校長のドクトル・ドルジエさんのところへ電話をかけましたら直ぐホテルまでいらしつて下さいまして、私の荷物を持つたりして学校へつれて行つて下さいました。異郷でご親切にして頂いたので大変有難く感じました。それから寄宿舎に入つて勉強をし始めました (『私の半生』39頁)

はるか年配のトゥルジェーが延の荷物を持ち運んでくれたことは、延にとってはよほど忘れがたいできごとであったようである。

69) *New England Conservatory 1889–Calendar–1890*, p. 70.

70) 「外行記要」, 24–25頁。

71) 中村 前掲書, 544頁。

72) 学校唱歌「蝶々」は、もともとドイツ民謡だった旋律を、メーソンが留学中の伊澤に提示し、伊澤が、渡米前に野村秋足に収集・補作させたわらべ歌の「蝶々」の歌詞をあてはめたところ、たまたまびつたり合い、その組み合わせで日本の唱歌教育に採用された。(安田寛『唱歌』という奇跡 十二の物語 讚美歌と近代化の間で』文春新書 2003年, 第3章「蝶々」)

73) 「外行記要」, 25頁。

74) この手紙の伊澤による訳は遠藤の前掲書に掲載され (142–143頁), 『百年史』第1巻に再録されている (243頁)。原文は上伊那教育会寄託・伊那市創造館収蔵伊澤資料にある。

75) *New England Conservatory 1889–Calendar–1890*, p. 70. NECの紹介はすべてこの書による。

76) 原文は以下のとおり。

Twenty years ago he [=Tourjée] was in the Maine woods with Mr. Megata, the Japanese commissioner. In their conversation Dr. Tourjée said: “You are introducing Western schools and studies into your empire. But there is one essential you are neglecting, and it is of radical importance. ...you can never get the full advantage of our education until you adopt also our music, and you never can be civilized by the standard of Christendom until you adopt also our system of notation. That pursued thoroughly in your schools will in ten years make another nation of you.”

The commissioner was deeply interested. “But,” he said, “we can not abandon the musical instruments we have used for centuries. Can not they be restrung?”

“..., the makers can rearrange them in the true scale, and adapt them to our music, without injuring their use for you own.”

Many of the instruments of Japan were sent to Dr. Tourjée, and their scales were made over. Charts of these instruments may be seen in the museum of the Conservatory, showing the original heathen and the converted Christian scales. At this moment Japan is teaching this regenerated music in thirty thousand schools and universities, and the Christianizing of Japan is enormously aided by Christian music.

Last year the result of that reformation was seen at the Conservatory in the arrival there of the first

pupil from Japan, -a brilliant young lady sent by the Empress, in order that her musical studies in her native land might be completed by a thorough mastery of the music of the West. The missionary utility of music, in aiding the spread of Christianity, is one of the germinal ideas of the Conservatory.

'The New England Conservatory of Music' in "*the Cosmopolitan*", Vol. VII, May-October 1889, pp. 490.

77) Anna L. Bing (1864-1923) NEC 出身。メソジスト派の活水女学院は1879年に創設され、ビングは宣教師として1888年に着任して音楽を担当した。1900年に札幌に移っている。その後日本国内で勤務、1908年に離任した。〔宣教師略歴一覧〕活水学院総合企画室所蔵：活水学院大学旧職員が文献資料をもとに作成したもの〕

ビングの指導のもと、活水女学院は1890年より、アメリカの最高の音楽院と同等のカリキュラムを実行した（活水学院百年史編集委員会『活水学院百年史』1980年、38頁）。1890年9月号の *Boston Musical Herald*（以下 *BMH*）の記事 'N. E. Conservatory Items' では、〈Many of our readers will remember Miss Anna Bing who fitted herself for musical missionary work, and went to Nagasaki, Japan, and will be glad to learn of her marked success. The characteristic avidity with which this interesting nation is taking hold of new and improved things in general, is seen in their marked interest and progress in the study of music.〉と前置きして、活水女学院で行われた演奏会のプログラムを、以下のように曲名と演奏者の名前を挙げて紹介している。〈The following sample pupils' recital program will be interesting: Piano duet, Marches Militaires, Schubert, Miss Bing and Mutsu Tanaka; Organ, Minuet, Op. 49, No. 2, Beethoven, Suye Shibata; Piano, Venetianisches [sic] Gondollied, G minor, Mendelssohn, Mrs. Quin; piano and organ, Adagio, Kalliwoda, Frances Davison and Katsu Kimura; Trio, Down in the Dewy Bell, Smart, Nine Japanese young ladies; Piano Duet, Valse Caprice, Raff, Mrs. Rogers and Mrs. Quin; Piano, Sonate E. Minor, Haydn, Presto, Finale, Frances Davison; Organ, Gloria, 12th Mass, Mozart, Yoshi Shimoura; Piano, Valse Brillante, Op. 34, No. 3, Chopin, Mrs. Rogers; Piano, If I were a Bird, Henselt; Rigoletto, Verdi-Liszt, Anna L. Bing.〉 (vol. 11-9 (Sep. 1890) p. 201) 5月号にも記事がある。

78) *Manual of the New England Conservatory of Music* 1886-1887の記事（手代木俊一『讚美歌・聖歌と日本の近代』音楽之友社 1999年、209頁）。

79) *BMH* 1891年5月号のトゥルジェー追悼記事による（vol. 12-5 (May 1891), p. 83）。

80) NEC所蔵のトゥルジェー関係記事のスクラップブック（掲載誌不明）。〈Through his personal influence, and under his advice, the system of musical instruction in Japan has entirely changed, and all its 30,000 schools made to conform to the methods in use in the New England Conservatory.〉

81) 'N. E. Conservatory Items' in *BMH* vol. 10-7 (July 1889), p. 164.

82) Emil Mahr (1851-1914), スイス・バーデン生まれ。延によると世界的ヴァイオリニストのヨーゼフ・ヨアヒム Josef Joachim (1831-1907) の弟子（『私の半生』、39頁）。1872-7年の間リヒターの指揮するバイロイト祝祭オーケストラで第1ヴァイオリニストを、1877年から11年間、ロンドンでの Richter Concerts でコンサートマスターを務めた。1887年から NEC に在職。（O. Thompson: *The International Cyclopedia of Music and Musicians*, Dodd, Mead & Company, New York, 1944 及び 1964）。

83) Carl Faeltel (1846-1925) ドイツ・テューリンゲン生まれ。ドイツとアメリカのピアニスト、教育家。フランクフルトで教えた後、1882年アメリカに渡りボルチモアで教えた。1885年より NEC に在職、トゥルジェーの後任として NEC の院長を務める（1890-97年）。1897年自らのピアノ学校を設立。ピアノ教則本をいくつか出版している。（同上）

84) 'N. E. Conservatory Items' in *BMH* vol. 11-1 (Jan. 1890) p. 15.

85) BSO のプログラムによる（NEC所蔵）。

86) エメリーからメーソンに宛てた、添削に関わる手紙が残っている（上伊那教育会寄託・伊那市創造館収蔵伊澤資料）。

- 87) Stephen Albert Emery (1841-1891) アメリカの作曲家、教育家。ポートランド、ライプツィヒ、ドレスデンで学んだのち、1867年よりNECに在職。ボストン大学でも和声学、対位法を教えた。150余の作曲を残した。*BMH*の編集者でもあった。(Thompson: *ibid*)
- 88) 'N. E. Conservatory Items' in *BMH* vol. 11-1 (Jan. 1890) p. 15.
- 89) Arthur Nikisch (1855-1922) 現在のハンガリー出身の指揮者。
- 90) Eugen d'Albert (1864-1932) スコットランド出身でドイツに帰化した作曲家、ピアニスト。1889年11月から12月にかけてボストンで、ソロと協奏曲（ベートーベン第4番、ショパン/タウジヒ編第1番、リスト第1番）のリサイタルを行った。G. H. Wilson: *The Musical Year-Book of the United States Vol. VII. 1889-90*, Alfred Mudge & Son, Boston, p. 25.
- 91) Anton Hekking (1856-1935) オランダのチェリスト。延のボストン滞在中は、1889年4月のBSOの演奏会で、Volkmanを演奏している（NEC所蔵プログラム）。
- 92) Pablo Sarasate (1844-1908) スペイン出身のヴァイオリニスト、作曲家。1889年の11月から12月にかけて、ボストンで公演し、ベートーベンやメンデルスゾーンの協奏曲などを弾いた。(G. H. Wilson: *ibid*, p. 25) *The Cosmopolitan*, Vol. VII, May-October, 1889
- 93) 'Concerts' in *BMH* vol. 11-5 (May 1890), p. 120.
- 94) <The last monthly meeting of the Beneficent Society of the New England Conservatory was held in Sleeper Hall. ...After the business session, Miss Koda, a young Japanese student, played two short violin selections.> 'N. E. Conservatory Items' in *BMH* vol. 11-5 (May 1890) p. 118.
- 95) NEC所蔵プログラム (New England Conservatory Programs - not cataloged), 及び*BMH*の記事: <Vocal Ricital given by pupils of Mr. Frank C. Morse.... The Gate of Heaven, Tours, Mrs Toyo Miyama, (violin Obligato by Miss Nobu Koda)> 'Concerts' in *BMH* vol. 11-5 (May 1890), p. 120.
- 96) みやま とよ (慶應元 (1865) -大正3 (1914) 年)。青山四郎『土器と黎明 ある伝道者の生涯』(グロリア出版会 1978年)、及び今泉源吉『先駆九十年 美山貫一と其時代』(みくに社 1942年)によると、美山豊は、のちに牧師となる青山昇三郎の第2子・長女として生まれ、ミス・ヤングマンの主宰する築地の新栄女学校で学んだ後、同校の教師となった。明治17年メソジスト派牧師の美山貫一 (1847-1936) と結婚、翌年渡米した。貫一はサンフランシスコ、ハワイなどで勤務、明治23年帰国 (今泉は貫一の帰国は2月としているが、豊は4月の学内コンサートに出演しているので、遅れて帰国したのかもしれない)。
- 97) NEC所蔵演奏会プログラム。
- 98) 今泉 前掲書, 551頁。
- 99) 「外行記要」, 25頁。
- 100) 同上。
- 101) 「東京藝術大学音楽学部旧職員履歴書」。
- 102) 「自明治十八年 至明治三十二年 外国人教師関係書類 音楽取調掛 東京音楽学校」東京藝術大学総合芸術アーカイブセンター大学史史料室所蔵のコピーによる。
- 103) オリジナルはメリーランド大学所蔵メーソン資料 (L. W. Mason collection in Maryland Nr. 160)。この資料は手代木俊一氏よりいただいた。
- 104) 「外行記要」, 25頁。
- 105) 平高 前掲論文を参照されたい。
- 106) 竹中 前掲論文, 3頁。

(ひらたか のりこ)

Studium in Boston von Nobu Koda

Noriko HIRATAKA

Abstract

Nach dem Studium an der Ongaku-Torishirabejo (der späteren Musikhochschule Tokio), die sie 1885 absolvierte, blieb Nobu Koda (1870–1946) weiterhin mit der Schule in enger Verbindung. Sie trat u.a. bei schulinternen Konzerten und bei der Konzertreihe in der Rokumeikan-Halle auf und gab Solo-Auftritte.

Damals schickte die japanische Regierung Stipendiaten ins Ausland, um junge Talente auszubilden, die dann die kostspieligen ausländischen Lehrkräfte ersetzen und europäische Musik auch auf einer höheren Ebene einführen sollten. Nobu Koda war die erste Stipendiatin des Kultusministeriums im Bereich Musik. Sie besuchte vom Mai 1889 das New England Konservatorium in Boston, um den amerikanischen Wegbereitern, die bei der Einführung der europäischen Musik in Japan geholfen hatten, für ihren Verdienst zu danken. Auch berichtete sie über die weitere Entwicklung der Lehre nach Tokio. Sie studierte in Boston Klavier bei Faelton und Geige bei Mahr und bereitete sich auf das Studium in Europa vor.

Im Juli 1890 verließ sie Boston und ging nach Wien.

Keywords: Nobu Koda, Einführung der europäischen Musik, Boston